

塔短歌会・東北編

『2025 vol.11』

(荒蝦夷)

東日本大震災発生直後から毎年発行された『99日目』から『2933日目』までの九冊の冊子を、十年を区切りとしてまとめた。塔短歌会の東北に関わりをもつ二十四人の一二七三首とエッセイ、作品評などが収められている。四七五ページのずっしり重い震災詠の記録。

『366日目』の座談会では、梶原さ世子が「今『99日目』を読むと、震災直後とも違う、今とも違う、「震災三ヶ月後」がここにあつて、そういう意味では、かけがえがないですよね」と語る。それぞれの立ち位置を意識し躊躇いつつも、それでも詠むという選択をし、発表する覚悟。ひとりひとりのその時々の表現は、震災後の現実と向き合った葛藤の跡であろう。

女なり男なりを超えたるかたち綱に掛かりて帰らたまひき 梶原さ世子  
耳鳴りは八年経つて声となる生き残されたお前が詠めと 佐藤 涼子

震災を詠み続けること記録することについて考え、震災詠をどう読むかという思索の起点となる一冊。

(斉藤 梢)

大養楓歌集

『前線』

(書肆侃侃房)

今読むべき歌集だろう。5年後、10年後にも読み返されて良いのではないか。著者は、救急科専門医として救急救命センターに勤務。まさに新型コロナウィルス感染症の最前線で治療に当たっている。病床で交わした契りその中に破るしかない約束がある

恐らく救うことの出来なかつた患者を詠んだ歌だろう。救急医として、これだけ悔しいことはないのではないだろうか。

医療者は泣いてはならぬ悲しみの際まに寄り添うためにいるから  
この波を越えたら出そうと退職の書類が三度眠れる引き出し

医療者の心も限界である。ただ筆者は目の前の仕事だけを見ているわけではない。コロナ後の世界に咲かす芽のあれば今はその芽を温めておけ

著者の目は、新型コロナの収束後の世界にも向けられている。一人の医療者の目から、患者・家族の悲しみ、医療者の献身的努力、そして世界的危機が見えて来る歌集である。

(伊藤 祐楓)

笹川諒歌集

『水の聖歌隊』

(書肆侃侃房)

現代社会において要求されるコミュニケーション能力の水準は高くなるばかりだ。その高すぎるハードル(＝他者の心)にぶつからないような技術が求められる。

絶望というほど暗くはなく、ほんのりと明るくながを諦め、がむしゃらな跳躍ではなしに言語コミュニケーションの高みを浮遊する作者。

ファのシャープ聴こえるような横顔のあなたは二元論を避けるひと  
払われている用心深さと、配慮は、自分よりも他人(作中の相手とともに読者も)を傷つけることを恐れる、自己でなく他者中心のナイーブさである。

優しさは傷つきやすさでもあると気付いて、ずっと水の聖歌隊  
ハードルのはるか上を浮遊すると、すべての終わり、死までが視野に入る。その諦めの地平の向こうにあなた・誰か・僕への祈りを捧げる作者の姿は、性別や年齢を明らかにせずとも非常なる対人関係意識の敏感さを備えた若者のひとりだと輪郭を結ぶ

ことができる。

(白川ユウコ)